

2024年度鳴門市人権地域フォーラム(記録)

テーマ 「ひとごと」から「わがこと」へ

～自己をみつめ、語り、人と人とがつながる人権学習～

日時:2024年8月16日(金)13:30開会

会場:鳴門市役所 2階大会議室

コーディネーター 森口 健司(T-over人権教育研究所・人権こども塾共同代表)

パネリスト 吉成 正士(T-over人権教育研究所・人権こども塾共同代表)

中野 伸二(T-over人権教育研究所・人権こども塾クルー)

柳本 歩(T-over人権教育研究所・人権こども塾クルー)

《司会者》

お待たせいたしました。定刻となりましたので、只今から2024年度鳴門市人権地域フォーラムを開催させて頂きます。

本日は手話通訳を特定非営利活動法人「あたたかい手コラボ」の皆様にお願いをしております。よろしくお願ひいたします。

なお、本日のフォーラムは16時30分を閉会予定とさせていただいております。お手元のアンケートについては、お帰りの際に、受付のアンケート回収箱に入れて頂きますよう、ご協力をよろしくお願いをいたします。それでは、最初に主催者を代表いたしまして、鳴門市教育委員会教育長 阿部孝弘よりご挨拶を申し上げます。

《鳴門市教育委員会教育長》

2024年度鳴門市人権地域フォーラムが開催されるにあたりまして、一言ご挨拶を申し上げます。本日はご多用の中を各地から多数の皆様方にご参加を頂き、2024年度人権地域フォーラムがこのように盛大に開催でりますことを厚くお礼を申し上げます。また、日頃より皆様方におかれましては、本市の教育行政に対しご支援ご協力を頂いておりますことに心より感謝を申し上げます。

さて、本市におきましても、これまで皆様のご協力をいただきながら、同和問題の早期解決に向けました各種施策の総合的な取り組みを推進してまいりました。しかし、今なお、同和問題をはじめ、いじめや虐待など子どもの人権問題、高齢者の人権問題。女性、障がい者、外国人に対する差別問題。また、高度情報化社会の進む中、インターネットによる人権侵害等、基本的人権が充分保障されているとは言い難い状況にあります。

様々な人権問題は私たち一人一人の課題であり、一人一人が人権尊重の担い手であることを深く認識し、自分のこととして捉え、その解決のために主体的に取り組み、人権尊重のまちづくりの実現に向けて確実に歩みを進めていく必要があります。こういった状況の中、本日の人権地域フォーラムが開催されますことは、自分自身をみつめ直し、広い視野に立って人権をみつめる上で大変有意義な時間になると確信しております。

私事で大変恐縮ではございますが、私が本日のコーディネーターである森口健司先生に最初出会ったのが今から20数年前、森口先生が当時ご勤務されていた板野中学校での、全体学習を参観させていただいた時でございました。生き生きと自己を語る中学生の姿に衝撃を受けたことを今でも覚えています。

以来、ご縁があつて勤務校での人権研修に来ていただいたり、この人権地域フォーラムの運営にも携わらせていただいたりと、森口先生のお話を伺う機会が何回かございました。その中で、森口先生がよく語られる豊かな日常のキーワードが私の心を捉えて離れません。私が人ととの豊かなつながりを意識するようになったのも、森口先生との貴重な出会いがあつたからだと思います。

本日も、「『ひとごと』から『わがこと』へ」をテーマに、パネリストや会場からの意見が参加者の心を揺さぶり、一人一人の人権意識が磨かれ、「自己をみつめ人と人がつながる人権学習」が豊かな日常へとつながる、実りの多い人権啓発・研修の場となりますことを願っております。

最後になりましたが、本年度もこの人権地域フォーラムが、松茂町、北島町、藍住町、板野町、上板町の各教育委員会ならびに、人権教育推進協議会の皆様方の積極的なご協力をいただき開催をできますことに改めて心より厚く(しみじみと)お礼を申し上げ、開会にあたりましてのご挨拶とさせていただきます。どうぞよろしくお願ひいたします。(拍手)

《司会者》

それでは、本日の人権地域フォーラムに登壇される講師の方々をご紹介させていただきます。皆様から向かって左側から、本日のフォーラムのコーディネーターを務めて頂きます、T-over人権教育研究所・人権こども塾共同代表 森口健司さんです。(立ち上がり「よろしくお願ひします」挨拶をし、着席すると同時に大きな拍手。パネリストも、同様に名前を呼ばれる度に立ち上がり、挨拶と拍手が繰り返される)

続きましてパネリストの方々のご紹介をさせて頂きます。T-over人権教育研究所・人権こども塾共同代表 吉成正士さんです。続きまして、T-over人権教育研究所・人権こども塾クルー 中野伸二さんです。続きまして、T-over人権教育研究所・人権こども塾クルー 柳本 歩さんです。

それでは、森口さん、以後の進行につきましてよろしくお願ひいたします。

《コーディネーター 森口健司》

(笑顔いっぱい)皆さん、こんにちは。鳴門市役所の会議室、5月に打ち合わせをこの場所でしたしました。本当にすごい会場でフォーラムができること。大きな大きなよろこびです。

(しみじみと)語るということ、自分の本当のことが言える。ずっと自分の中に秘めてきたことが安心して言える。そこに深い絆が生まれる。「共感」と「連帯」、「信頼」と「尊敬」、互いへの「感謝」。

子どもたちがイキイキと育っていく場面に出会ってきました。私は教師になって43年目。65歳です。今、松茂中学校でチーム担任制という形で3年生を担任しています。22歳で教師になった時に、こんな幸せな43年間が自分に用意されているとは想像もしませんでした。

自分の言葉で自分を語る。その中学生の姿にいつも力をもらっていました。中学3年の子どもたちのどんどんどんどん成長していく姿を、この3年間見てきました。毎年毎年出会ってきた子どもたちと絆が生まれ、大きな大きな糧になっています。

今日も、写真を撮ってもらっている松茂中学校の2人の仲間がいますけれど、この2人も北島中学校で、学校の近くに北島町図書館・創世ホールという場所があるんですが、そこに行って語り合いの人権学習をした。2006年度・2007年度の教え子が、今、松茂中学校で教師として一緒に仕事をさせてもらっています。今、毎日彼らに支えられながら私の日常があります。

(力を込めて)今日のお手元のチラシの中に、愛媛大学教育学部の大学生のレポートを入れました。このフォームが今の形になって22年目になります。このレポートは、2007年、今から17年前に出会った大学生からのものです。非常勤講師として3日間の集中講義を実施するのですが、最初の2日間は90分5講の講義をし、

3日目は40名くらいの学生にマイクを渡して、2日間の私の講義から学んだことを語ってもらうんですけど、その5分から10分の語りの中で、このレポートを書いた学生は冒頭にこう言いました。

(ゆっくりと)「外部講師の方が、どんなきれいごとを3日間並び立てるのか、その姿をのぞいてやろうという、大変不謹慎な気持から、この講義の受講を決めました」

この語りから始まり、自分のことを一生懸命この学生は語ったんですけど、言いにくそうに言いにくそうに語る姿に、深い深い思いがあるんだろうなということを感じました。

この学生から送られてきたレポートを読んだ時に、高校時代、大学生時代、部落出身であることを隠し続けてきた自分と重なりました。この学生の大学4年間の切ない思いが、自分にそっくり重なっていきます。このレポートを紹介して、その後、パネリスト3人の語りにつないでいきたいと思います。

この大学生が、どんな思いでこのレポートを綴ったか、それがずっと心に突き刺さってきます。当時の感動や思いというのはいつも私の中にあります。この学生のレポートは、同世代、20代前半の同僚に朗読をしてもらいますので、それでは、スライドの文字と朗読を通して、この学生の思いを受け止めていただければと思います。

【2007年度愛媛大学教育学部における集中講義「同和教育」のレポートから】

3日間、この講義を通して考えたことは、やはり差別を受ける当事者でないと部落差別の痛みは分からない、ということである。

私の母の実家は被差別部落にある。私は昔から部落差別について母からたくさんのこと教えてもらった。どれもこれも理不尽なことばかりで、そのことについて考えると、いつも涙が出る。母が受けた差別、祖父母が受けた差別は、森口先生が語られた体験談と非常にぴったりと重なった。職業、対人関係、結婚など、日常生活においてしばしば差別が生じ、その度に母や祖父は悔しい思いになり、卑屈になり、あきらめるようになったようだった。

私はそれを聞いてとても辛かったし、歯がゆかった。それと同時に差別はそう簡単に一掃できる問題ではないということを感じた。教育現場で行われている同和教育で、果たして差別は撲滅できるのだろうか。人々の意識は変わっているのだろうか。

先生の講義を聞いて、他の学生たちは非常に衝撃を受けたようだった。それは、今まで同和問題をよそ事と捉えていた表れだと思う。そして、同和問題を遠い問題のように扱ってきた従来の同和教育の結果だと思う。

私が今まで受けてきた同和教育は、歴史の授業のように事実を提示し、差別はいけない、と締めくくって終わるものばかりだった。差別を受けた人たちの思いや、現状には一切触れないために、どうしてもいまいち現実味がなかったのだろう。核心に触れない同和教育を、私は偽善だと思う。だから、同和教育が大嫌いだ。悔しくて腹が立つ。部落の人たちがどれだけいやな思いをしてきたか、思い知ってほしい。そして、よそ事ではない、身近なこととして考えてほしい。ずっとそう思っていた。この願いが、森口先生によって実現されたことに喜びを感じる一方で、まだ、怒りが消えない。

「初めて同和地区の人にお会いましたが、思っていたのと違って全然一般の人と変わらなくてびっくりしました。」という発言を度々聞いた。とても悔しかった。自分がその立場ではないからできる発言。さらっと出せる発言。当事者にとっては胸にグサッと刺さる発言。同じ発言なのに立場が違うと感じ方にこんなにも違いが表れるのかと思う。自分の周りが自分と同じだと思ってはいけないと、非常に強く感じた。皆それぞれに事情があって、抱えているものも違う。だから感じ方だって違っていて、誰かの発言や行動に対して面白がっている人もいれば、何とも思わない人っているだろうし、いやな思いをしたり、悲しい思いをしている人っているかもしれない。

私が皆に求めているのは、それに気づくということだ。これは差別をなくすとかいう以前の問題で、人と出会い、つき合っていく上で、最も心に留めておかなければならぬことではないか、と思う。

個性が尊重される現代の中で、感性の個性が見落とされるのは悲しすぎるし、矛盾していると思う。そして、このような矛盾が積み重なっていじめや差別が起こると思う。人がどのように感じているのか、考えているのか想像することを、私たちももっとしなくてはならないと思う。そのためには、人とたくさんの意思疎通をすること。意見交換の場、協力の場、共感の場にたくさん出て行くことが大切だと思う。部落差別がなかなかならないのも、部落外の人々が部落の人々の思いになかなか触れなかつたからだと思う。

私は、この講義を受けたことを祖父に伝えたい。祖父は死ぬまで自分の生まれにコンプレックスを抱いていた。「自分には学がない」と母に言っていた。祖父は同年代の人々と比べると生活環境や待遇は悪く、能力は低かったはずだ。しかし、人としての質はとても秀でていて、すばらしい人物だったと私は思う。自分が弱い立場だから、嫌な思いも、悔しい思いも、恥ずかしい思いも人一倍してきた。だから人の気持ちをよく理解していたし、皆を公平に扱っていたし、自分よりも皆のことを優先していた。だから、祖父のお通夜と葬式の時には座敷に入りきれないほどの弔問客が訪れていた。生前は、単にいいじいやんだとしか思っていなかったが、死んだ後、祖父の人としての偉大を感じた。

講義を通して考えたことを祖父に話したら、涙もろい祖父はきっとすぐに涙目になってしまうだろう。そして、表面では「Y子ちゃん、すごいなあ」というけれど、内心では「わしの生まれのせいで嫌な思いをさせてしまつてすまん」と思っているに違いない。祖父は優しいせいで、自分を責めることがしばしばあった。優しさが祖父を苦しめたのではないということはもちろん、分かっている。理不尽な環境が、祖父を卑屈にさせていったのだ。

私は、祖父に感謝している。同和地区の生まれでよかった。弱い立場だからこそ、人の痛みを人一倍分かってあげられる。人を大事にしようと思える。祖父には生前も、そして死んでからもたくさんのこと教えてもらった。人を見かけで判断しない。素性で判断しない。学歴で判断しない。経済レベルで判断しない。その人の人柄だけを見て判断する。簡単そうで、当たり前のように、実は難しいこと。でも私たち家族はそれをすることができる。

祖父の生き方を心に刻んで、これからもとの出会いを大切にしていこうと思う。

(一言一言を丁寧に心を込めて)皆さん、本心を語るところから生き方が変わります。「生活ノート」、これは毎日の生活を綴る。教師になった3年目に、その取り組みを先輩の先生から教えてもらって、41年間ずっと続けてきました。その生活ノートに私はずっと励まされ支えられてきました。毎日毎日提出される生活ノートから、中学生のすごさを知りました。

そして、1990年にスタートした板野中学校の全体学習。体育館でマイクを握って語る中学生の姿に強烈な感動と、私に対する突き上げを感じました。部落出身としてどう生きるのか。生きることの意味をずっと問い合わせました。